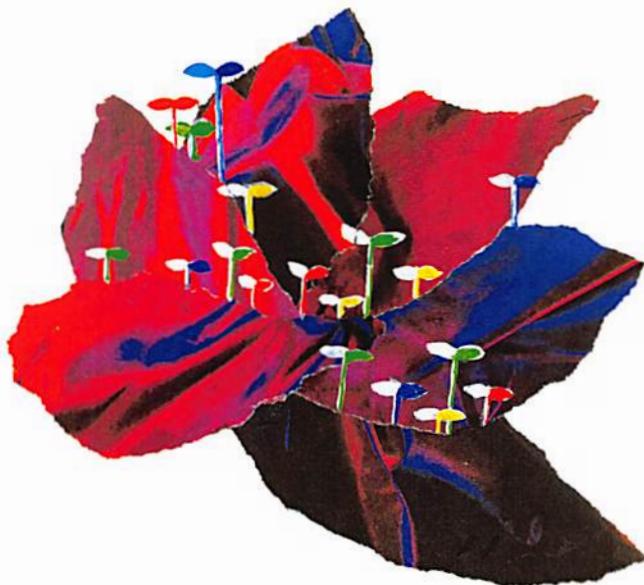


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022. 7



令和4年7月1日発行(毎月1回1日発行)第70巻第7号

No.770

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。



# 亀鳴く

高原 桐

森の会に所属。  
著書に歌集、エッセイ集がある。

源流にあくがれながら彷徨さまよひて北上川の石を拾ひき

君を待つ夕べの耳を研ぎ澄ます亀鳴く声の聞こえるほどに

一度だけ稻妻のやうにひらめきて君の居場所へ駆けてゆきたり

アパートの戸に立て掛けし花の傘に雨滴したたらせ並ぶ男の傘

奈良山の麓すねもとほり夕暮れの月湧く山を君と眺めき

いつしかに一年づづくウォーキング立夏の朝は白きシャツ着て

BGMにバッハの調べ聴きながら林檎買ふとき未来明るし

峠まであと一息といふところ科しなの大樹の風下りて来ぬ

構内の工学部前の扇骨木白き小花を咲かす五月よ

かなめらち

構内のヒマラヤ杉に球果見ゆ図書館一階のひらき窓より

染め付けの夏の祭の大皿にあをあをと盛る能登の鯖鮓

ほんたうに輪を描くだらうか初夏の岬の空の鳶の滑翔

分け入れば芒の原に道ありて背を押しぐれる秋風とゆく

秋の日を赤き紙袋のフランスパン抱へさまよふ元町通り

近寄りてすぐに後を見せて去る鉢を宇宙に金魚の気儘

白き花ばかりを咲かす板垣の家の三月今朝の木蓮

小綏鶏の三たびほど鳴き鎮もれるむかし女の駆け込みし寺

ある時はやさしく時に恐ろしき円空仏像の鑿跡の影

かく細き竹の支柱を頼みとし挿し木の薔薇の紅く芽吹きぬ

捨てられぬ古き暦に記されし約束の日のハートの印

サイン

# 作品 A

奥田陽子 四月 羊

声励ましわが決断を支えんと子の言いくれぬひと日の雨の夜  
うなだれし桜の上にそぞぐ雨日暮勢える川の音する  
花競う四月何時より空天を抱きしならんわが生まれ月  
卯月いまだ戦いやまず隣国に戦車贈りし「モルダウ」の国  
モスクワのデモに捕われし老いし女いたく小さしまだ甦りくる  
奪われてしまえり幼き命さえ「てぶくろ」はぬくとき世界描くを  
まぶしきに眼を伏す」とく通り過ぐ炎ゆる花桃かがよう桜

小野雅子 花々 羊

紅梅も桜も終はり花水木ゆつたりと咲く光る葉の上  
うす紅のはなみづき咲く赤堤のあの道の木も花あふれるむ  
名は知らぬ小川の岸にすかんばの茎を吸ひしよ疎開地の春  
ファインダー覗くごとくに切り取りべランダからの風景を見る  
くれなるが兆すと見ればたちまちに花の壁なすつじの垣根  
大き花は蜜だけを吸ひ紅の邊き小さきつじは食べたり甘き  
とりとめもなくいろいろを思ひ出し春の夜音もなく更けてゆく

磯田ひさ子 万国旗 森

色どりの乏しき二月の公園にけやき動きぬさみどり煙る  
公園の守衛のことし片すみに長く咲きゐるくるくる椿  
くさぐさの木草うるほふ公園に子らの彈ける声もどり来る  
自転車を連ねる野球少年のオレンヂ色のユニホーム光る  
コロナ禍をくぐりて踊る運動会「ソーラン節」に「よさこい踊り」  
女子高の運動会の「荒城の月」今も踊つてゐるのだらうか  
万国旗ひるがへりるし運動会きな臭き世界など思ひも寄らず

市原やよひ 四月 萬

兄ちゃんのコーディネイトとはにかみて私服の高校初日の孫は  
今日は何を着て行つたろうか帰宅時を楽しみており祖母というもの  
思い入れ強き木香ばら切れという孫の車の為にと夫は  
切られたる根の吐く息か庭隅を黒に染めゆく水出で来たり  
何事もなきが如くに整いし車置き場に滑りこむ赤  
真夏日が四月に現われあくる日は暖房つける地球は病めり  
現実と見えない現実今日も又見せられておりテレビの中に

梅本武義　思うこと

・羊

菊地栄子　クエン酸

・鴻

春空を音よりはるか先を行く銀翼見上ぐ平和か日本

終戦の頃思い出す映像に憤りつゝもどかしき日々

ブーチンはサタンの化身とふと思ひ嫋る竹の子へ鉄の一撃

金婚の日が過ぎゆくと思いつつ言うこともなしコロナ禍なれば

自尊心傷つきおれば不機嫌と妻に避けられ一日過ぎゆく

臆病に生きしものよと夜半に覺め思い出す岐路雨の降る音

寅年のトラの逃亡コイ迎勝走者一掃ピッチャ一が打つ

大浪美雪

風車

・森

春の陽をのたりと返す海の上白く塗られし風車が一機

東洋のドーバーといふ屏風ヶ浦十キロ先まで崖のつづけり

義経の伝説語る大岩は逆光のなか耳を立てをり

渚辺に青鷺一羽黒鷺を声におどしつ小魚をとる

春おぼる（地球の丸く見える丘）想しくあれよ地球の未来

見霧かす大地に風車が三十機回るものと休むものあり

尖りたる灯台印の春キャベツピクリスにせんとリュックの底に

神田鉛子

桜

・大

やはらかきピンクに霞むヤマザクラ箕面の山を彩りて咲く

風に散るさくら吹雪の花びらに通かな人の声が乗り来も

降りかかる花吹雪のなか佇みて桜のいろに染まりてゆかむ

ソメイヨシノの散り散く道に後追ひの八重桜咲く光あつめて

葉桜となりたる道をゆきゆけばあふるばかりの八重桜に逢ふ

逃出することなく過ぎしこの春を近場のさくらに満たされてゐる

造幣局の桜の映像見るほどに歩みし若き日が蘇る

菊地栄子　クエン酸

・鴻

茶匙にてひと匙というクエン酸薄め飲みたり仰せのままに

口中の手術の病癒えしとうクエン酸を飲む効用を聴く

血液の検査結果の報告書数字は何れも正常範囲

検診のあたりにクエン酸飲み継ぎ効果にありしか清明の春

コレステロール高きにひと粒飲み継ぎ来十年余りいつまで続く

宵ごとに猪口に酢を飲む習慣の年上の友長寿をなしき

クエン酸白き粉ひと瓶賜びにしを常飲みがたし傍に置けども

北山雪男

棄民の娘

・伊

娘より離婚せし旨聞く受話器 理由・経緯触れるままに

中年のバツ一娘に待つ職はおほむねパート 明日を刻まれ

職場にはパワーハラ、学校にはイジメ 大和島根に逃げ場塞々

すべり台社会の国ゆ<sup>ゆ</sup>外国に職場求めて棄民の娘

長時間サービス残業 海外に在りても日本企業の性は

台湾に暮らす娘の仔細聞く妻の口にて諒解されし後

風が吹く老いては拱手傍観のむらぎも揺すりジグザグに吹く

木村文子

うすべら

・羊

体内の時間がとまり腸が胃がぱかりと虚空に浮かんだよう

歩道橋を渡りゆくひとこんなにも遠くからでもあなたが見えるよ

この雨もみぞれも雪も涙さえ海へと還る途中のすがた

大事と捉える心のうすべら 埼を越えたる雪くずしゆく

正解はない人生を生きている無数の解あり冬の星々

たっぷりと冬に压された花壇よりクロッカスがいま顔を出す

言葉より先にこころがあふれ出て花はその手を宇宙へのばす

草刈十郎 花まつり

・世

小林能子 T.Y.O公演二〇二一

・羊

ウクライナ侵略による避難民母子の姿水点下のなか  
ロシア軍の侵攻続くウクライナこれほど哀しき春が来るとは  
年中をマスクしたり季節感大方無くしてしまひけるかな  
山々の影優しくして山笑ふ奥へ奥へと笑ひ継ぐかに  
佳きことも悲しきことももろもの事多かりき三月も果つ  
啓蒙や防空壕を知るわれらサイレン聞きて避難せしこと  
とりどりの花ばな咲きて雑草のことく人ゐる花まつりかな

國井節子 弟

・春

母逝きて五年過ぎたる春四月、末の弟みまかる知らせ  
ひと回り我より下の弟の先にみまかる何かが狂ひて  
戦争が終りし昭和二十二年希望を託して生まれし弟  
弟の柩にすがる小さき孫花の可憐さ散華となりぬ  
叶ふなら母の寿命の百までは生きたしと思ふ弟の分まで  
住まひ来し四十余年のこの家のこの一握の土のぬくもり  
夕焼けをふたつに分ける飛行雲ねぐらに急ぐ白鷺のむれ

河野繁子 川端鶴

・雁

リハビリの途中の休み場しんとしてニホンカワトンボ羽きらめかす  
ぶきよくな世渡りならん蛾のよくな色の羽もちぎこちなく飛ぶ  
散歩道日々の移りのあっけなく上不見桜はな終わりたり  
山住のここに折り合ひ付けながらロシアの侵攻画面に見入る  
「婦人も多き故ディサービスに『お前も来んか』と説かれている  
「わからんけー努力します」と言う人になさけなく行つ涙して行つ  
「おこらすに仲良くしよう」と手を伸ぶに申し訳なくあふるる涙

近藤芳仙 婚の日

・虹

婚の日の主役となりし男の孫が挨拶しをり スマホに見入る  
大勢に祝はれていま紅潮の笑顔やさぬ孫とその嫁  
ささへあふ妻をめとりし男の孫よ新しきもの笑きゆけかし  
こここめし我が祝電の披露されスマホ近づけ耳そばだてる  
テーブルのパーテイションもあるだけの存在となり妻はたけなは  
愛犬のモズクとともにサインすと若きらの婚ユーモアに富む  
上海の息子にかはり嫁のする両家お礼の落ち着きの声

春を呼ぶ風をとらへて山菜萸の黄の小さき花ひらくころ  
新幹線止まりて母の代はりにと贈られしチケット押し鐵きぬ  
坂本龍一と東北ユースの約束が実りて新曲「いま時間が傾いて」  
序章より幽かに響く鐘の音は十一を打つ 哀しみ鎮めよ  
復興は半ばに在りて小学生が大学生となる十一年  
ユースらの「第九」歓喜の合唱も命の輝き響かせて「いま」  
列島に地震放射能暖化コロナウイルスにも困境はなく

近藤栄昭 袋

・虹

体力は意識を超えて動き出す一步は二歩へ山道進む  
肌押せば滲み出ることく酒を飲み腕な青雲胸にしていた  
魂の入れ物薄く破れるか再構築へ地べたに添えと  
崩れるか心に隙間ゆるみくる土に寝転び再生を待つ  
山頂に大風入れて膨らませ飛んで行こう隣の山へ  
足の肉パンパン膨らむ肉袋一山一山三山越えきて  
下山して街に帰れば萎みゆく次まで耐えるギザギザストレス

## 坂上直美

春爛漫

・天

## 柴田登志恵

花衣

・天

春爛漫 一条の城の庭園を一人和服でそぞろ歩みき

君あらばともに桜を愛すべきを夕暮れひとり散るを眺むる

戦争もコロナも先が見えぬ間に桜は咲きて散ってしまいぬ

わが乳房むなしく老いたいぬ子を生さず君とも遠く離れ来しまま

ああ全て世は事も無し春の空大きく白き飛行船ゆく

四十雀ツツビツツビと声高し鳴呼いまは春生命地に満つ

道の辺に桐の木立てり紫の花天を指す吾もかく在らん

## 坂出裕子

桜

・洛

いつまでも冷たき冬と思ひしがはつかふくらむ桃の蕾の  
梅と桃、さくらと花は美しく明るい空のもとに咲けども

満開の桜の下を歩みつつこころは晴れずコロナの春は

マスクして話す言葉の何がなしこころこもらず空にただよふ

外つ国の戦争の記事とほき日のいくさの日々の思ひ出されて

コロナ禍とウクライナ戦じつと思ひそめて生きてゐるやうな日々

人生のはじめとをはり暗闇に閉ざされ生くる戦争コロナ

## 篠原まり子

おもかけ

・羊

大地震は未だ忘れ得ぬ時に来る惨事の報道人のおもかけ

渦を巻く桜花びら乱れなく風が運びて果ては散りぢり

花見酒終えて逝きたる人ありて本望だらうと語るは易き

ロシアにて生まれ歌われ殺戮に消えてしまった「百万本のバラ」

夢の中父ははの声聴き分けて雪でまみれた体が温い

沖縄戦名歌に思い寄せつゝを今帰仁歌会に求めしシーサー

断捨離を成さぬ言い訳語るなく片付けられしのち寂しさ

## 鈴木結志

自力の花

・福

自らの「石に立つ矢」の一念に意連の技を古筆に学ぶ

うた一首謡の仕掛けもなく詠みて老いの一途の意志をひき出す

「銀河九天より落つ」詩をたたず紫雲にけぶる滝さくら花

表現は自力の花とふでとりて書の個性美を自らに生む

新聞は知的財産みずからへの栄養としてわが身を肥やす

意あまりて言葉足らずなど言わじ情報を得て事実たしかむ

日暮しの平凡未熟動向の株価指標は紙上にまかす

## 関根栄子

頑張り

・埼

庭先のカタバミ引きつ幼目に囁みて滋味を知りいし記憶

雨上がりの空氣を吸えり人気なき道に入りてマスクをはずす

野の道に踏みつつ行けりそのかみは芹や蓬の摘み草せしが

頑張りは駄目ですよと医師の言う脳は出来た事を覚えていても

ひとつそりと消えゆくものか便りなき人思いつつ眠りに入る

白居易の「長恨歌」をふと思い立ちたしかめんとす何故か

あっけなく花の終りし川土手に今日は賑わう釣人の影

路の上の埋葬さへも許されぬむくろへさくら降れ花衣

ジェノサイド必ず軍につきまとひ武器持たぬ人あまた殺めらる

侵攻にひと月がほど耐へしのち読み名は眞のキーウに代はりぬ

マリウボリ掌握の報ロシアからフェイクカリアルか何故のフェイク

薔薇色の露海から街へみちタベの鐘を背に帰り来る

しづやかに花降る朝地域猫餌場を出でてひと日生き初む

ベランダのレインコートの空色と靴の黄へ降るさくらうすべに

関根和美 イコン

・埼

滝田靖子

蒲公英

・新

ピクトリア市場に吊られし肉塊の臭いもろとも不意に浮かび来る  
い臓の不具合言いあてし豪州の手のひら愈しの靈氣をまなぶ  
ライ麦のパンを分け合う復活の朝のひかりのなかの追憶  
ウクライナ国旗の色に染めつけるイースター・エッグに願いを込めて  
ウラジーミル・ブーチンの名にかなしめるイコンの聖母ウラジーミルの  
避難民み堂訪うやと正教のイコンも飾られふたつきを経ぬ  
語りつつ歩みし道はこんなにも遠くあじけなし一人あゆめば

高尾恭子

花は散る

・大

竹下妙子

白き恋

・森

勝ち負けのあるはずもなく可視化する瓦礫の街をあるく人影  
春宵の酔い冷めやらず花は散るリアルタイムの戦禍つたえて  
流さるる果ては芥の花袋ひと世はひと夜の神話にあらず  
たえだえに枝垂れの花を咲かせたり老いて戦さの語り部桜  
しらしらと花を散らして柔らかき雨は野末の核を洗う  
戦争がリアルタイムに飛びこんで昼休憩の餌食をする  
戦桜いまを盛りと見得を切る又兵衛の名を独り占めして

高津砂千子

ベゴニア

・風

田土成彦

元興寺

・宙

ベゴニアのあふれ咲きたる館内にシャッターを押す音しきりなる  
いかほどの人の手になるベゴニアぞ色さまざまに乱るる花 花  
妻の乗る車イス押す老い人の太き指先なに語るや  
ほめられてなお色を増すべゴニアよ天より蜜のしたたることく  
やわらかき花びら重ね幾かさね苦は見せざりきベゴニアの花  
自然の風が欲しくはないかと問いかくるベゴニア館の花たちに向き  
オレンジの太陽の色のベゴニアに最も惹かるるベゴニア館

エンジンを止めて車中に聞いてゐるフロントガラスを打つ雨の音  
伯母遊び悲しむ人は居ないなど言ひるし母が涙してゐる  
主なき庭にひつそり咲いてゐる導の火のやうに蒲公英いち輪  
庭すみの畠も花壇も均されて主なき庭しんとしてゐる  
寝たきりの晩年コロナ禍の晩年生かされて生きて命枯れ果つ  
家族葬とふ七人の弔ひを不満に思つてゐるだらう伯母は  
鎮魂の涙のかはりに降りそそげ地にかへる命に桜花びら  
「韓國岳」に朝の陽射してつらつらと椿の若木光りてゐたり  
宿など返さぬ胸に梅雨の雨激しき音立て花野へ去りぬ  
里川を過る風の道ありて風渡るときさざ波立てり  
小川の水ぬる五月なり山の鶴も畑に下り来る  
白つつじ風がさらさら囁けば吾が思ひはも白となりゆく  
二十年を生きつきて來し白つつじ白きがゆゑに吾れ恋ひにけり  
里山に夕つ光の沈むとき吾が心にも白き恋あり

田 土 才 惠

地 震

・ 宙

ひめうつぎ竹に活くればしろじると人待ち顔のたまゆらみえて  
うす寒き桜吹雪に紛れつづ風となり行くひとつ御盆の  
花冷えの桜炎となり舞えり卒寿の命閉じたる義姉の  
消えゆきし命の焰花冷えの風に紛れて塵土に舞う  
薄寒きよべの小さき地震のあり別れを惜しむ御盆の声か  
義姉さんと親しく呼びし浪速の地みんなあの世へゆきてしまえり  
嫁ぎきて兄姉得たる喜びのかの日は遠し義姉近きませり

玉 井 綾 子

色

・ 羊

真っ青な空に真っ白な月を見る 出過ぎた真似をした翌日に  
職場内結婚ニュースが呼び起こす雌雄異株の冬青の繁り  
花吹雪コントのように大量に舞いあまた生む震える人を  
自宅での待機期間の夜夜中 藤の妖美を窓越しに知る  
朝食の仕度するため幾つもの厨の白き戸棚を開く  
登校班に置いて行かれし班長の八重桜の下追いかける腕  
珪藻土の生成りの壁に糸屑と何度も見紛う蜘蛛のいる初夏

虎 谷 信 子

追憶歌

・ 伴

遠野への想ひ馳せつつ、過ごす日日、全集重きを抜き出してをり  
遠野への想ひ馳せつつ、縁に出て、小春日のなか 資料あれこれ  
柞紅葉 ひとところのみ明かる朝 檻現の杜 石段租し  
からまつの黄葉ふぶける 墓山に 彼方と覗めぬ。田居の生家を  
佐々木喜善の墓処に すさぶ風止まず。師の文字摺りぬ。心虔しく  
からまつの黄葉散り頻くなかゆきて、何の遠くゑ聞くとなく聞く

中 島 央 子

無言

・ 森

ウクライナ侵略のニュース聞く夕べ娘と無言に蟹の身ほぐす  
わが背丈越ゆる曾孫默ふかし骨付き肉をかぶりつきたる  
子の土産輸島の塗箸などみたりお多福豆を三つ四つ抓む  
風邪ひくな転ばぬやうにと子の声が追ひかけて来る齡となりぬ  
夜半さめて脈絡もなく思ひ出す亡き歌友学友両手に余る  
国立の大学通りの花陰に学徒兵に果てし君がたたずむ  
賞味期限切れても消費期限まで楽ししまむかなスローライフを

永 塚 節 子

声

・ 銀

おりおりに問を投げればそやなあと関西弁の答える届く  
コロナ禍に漬えし旅はもはや夢柳生の里に春は巡れど  
訪ねたき寺のいくつか夢の夢友おればこその大和路散歩  
これの世に友いまさねど耳朶深く残りいる声消ゆることなし  
アスファルトと土の狭間に点点とうすべに色のかたばみの花  
あるがまま静いもせずかたばみは朝に開き夕べに閉する  
ふりかえれど何ほどのもの残りしや母の時間の倍ほど生きて

仲 西 正 子

てぶくろ

・ 沖

ウクライナでロシアで子らの読みあれ「おおきなかぶ」と「てぶくろ」の本  
ウクライナは戦禍になれりわが国の書店に並ぶ絵本「てぶくろ」  
ウクライナ生まれの絵本「てぶくろ」は冬の心をあたためくれる  
とおき日に子らに聞まれ「てぶくろ」を読みしことなど浮かぶふくら  
訓練と知れどおののく空を裂きオスプレイ飛び爆音落とす  
終息の見えねば日々に増えてゆくパンデミックとウクライナの死者  
朱く咲くデイゴよ語れこつこつの木肌に染みし戦場の血を

## 白子れい 疏水の春

・洛

半月の白くうかべる朝の空見上げつゆく疏水のほとり  
堰かれいし疏水に水の流れ初め桜の畠はころびはじめ  
ホーケキヨと語りかける鶯の声を背になす朝の散歩路  
音たてず流るる疏水に枝のべて染井吉野は今をさかりと  
染井吉野咲く朝のみちいで会える人の増えたりぶつかるほどに  
花筏ことしは出来ずチラチラと花びら水面にうかびていしも  
西山に傾く夕陽に照らされて疏水の流れキラリキラキラ

## ばかりょうこ

印残して

・鹿

花筏いまし逝かんとする人を乗せゆかんと待つたゆたいながら  
花を追い花に追われて男ぞける過去帳に生きいし印残して  
散り敷し花びらさて遠回り樹下はいにんの男の御座所と  
絢爛の花の狂気に巻きまるる危うさのきょう四月一日の  
季いくつめぐり来しかどくらべらと遣されしきみには花吹雪の忌  
逝きし男ゆかせし女を偲びおりしどとに雨の降りしきる夜半  
雑草に花咲きたれば愛おしく水かけやりつつ不意に涙す

## 浜谷久子

置き土産

・地

ばかり空く手持ちぶさたの温とき日土筆を摘んで榜をゆっくり  
置き土産はマスク切り爪靴下の片っぽ洗濯物の山ほど  
児らの絵を部屋いっぱいに掛けてゆく娘息子と二代が並ぶ  
見知らぬ地男の子三人それぞれのスタート四人の祖父母が見守る  
夕食の準備は要らない保育所の迎えも今日から孫の世話をな  
三度目の土筆を摘んで持取りしながら明日の予定を立てる  
散りいそぐ白木連の花びらを通りすがりの児が拾いやく

## 浜本英美名前

・夢

ホームスパンの重量感を肩にのす「仕立てにくかった」の声もろともに  
凍て土に足をふみしめ中天にかかる半月仰ぎおりたり  
ゆるゆると東へむかう雲のむれ連れなりゆけばさびしくないか  
何せむと門に行むわが姿眺めすぎゆく児童一礼  
親鳥がひいな引きつれ漸くに朝の道を渡り切りたり  
会場をめぐる競走馬のその名前おかしくて記す「おぬしなにもの」  
万華鏡眺めてしばし安らぎぬくれたる君の心ものせて

## 檜垣美保子

春の夕

・昴

さかな屋の軒先に雨のしずくしてトロ箱の前に透明の傘  
トロ箱に水ざくざく春の夕 目を見ひらきてマトウダイ二尾  
意味のある模様か否か知らねども黒き的もつマトウダイ旨  
しゃがみこみ海松食貝に触れているおさんこつんつん指の挨拶  
しんまいの一人暮らしの友の言う「いろんな顔のすすめがいるの」  
打ち捨てし一冬まえのシクラメン春おわるころ赤き花ひとつ  
町内会総会のちの懇親会缶ビールもち帰りバキッショケビットと

## 福田庸子 古道

・今

子供はどこに生くるや爆撃に焼き尽くされし広き街跡  
爆撃の瞬間までも映し撮る衛星画像をどの局も採る  
冬越して湿る枯葉の続く道果てなる奥は静まりし森  
去年の葉の重なるまことに土と化す森の奥處を続く古道は  
重なりし古葉のしめりのやさしみを保つ細道鎌倉街道  
日に数度朝が来るらし母の部屋戸閉めおはやうと告る  
父よりも祖父母よりも十年存へる我に覺悟の未だ成らざり

藤田美智子　泣きぼくろ

・新

牧雄彦　いのち

・大

ひとを急かしわれもせはしく動きつ散り急きたる桜を惜しむ  
ほろ酔ひに昔語りをする君の泣きぼくろひとつになせか目がいく  
乾びたるからすうりの寒搖れるたり終まる爲の若葉が光る  
君の不安に寄り添へぬまま胸に吸ふ若葉の深く息する匂ひ  
本音をすばり言ひてもよきか臺山の山腹今日はくつきり見ゆる  
大き音立てて飛びゐる熊蜂はひたすら小さき翅をふるはす  
言ひ返す言葉時経て見つかればまた新たなる悔しさの湧く

藤森巳行

君かへす

・銀

白秋の「君かへす」の歌に憶るる経験なきゆゑ我には作れぬ  
我が君をかへすことなく住み着かせ五十五年と共に暮らしぬ  
初恋の君は林檎の香をまとふリンゴ農家の夢見る乙女  
桑の葉を背負ひて帰る母と我夕焼け色に染まりし思ひ出  
孫のサッカー見てゐる我も興奮し「そこでシユートだ」声張り上げる  
爺馬鹿か孫は将来日本のバッヂオになると期待し応援  
白マスク黒マスクとが捨ててある公園のベンチ不思議な光景

船田清子

ぐつすり眠る

・天

空へ向けさやぐ若葉のさみどりをわがものにせむと求むセーター

「グッスリと眠れる幸せ」ウクライナ避難者たちの喜びの声

七十数年以前の思ひがよみがへる終戦直後の不安と安堵

おぞましきあのB29のエンジン音尾鷲湾より地響き北上

防衛費なるものに氣も留めざりしおのが迂闊にふと気付く　今日

花みづきつまくれなるをたたせつ「私の番よ」と葉桜の下

盛り上がる緑やさしき葉桜にヒヨもズズメももはや集はず

余命宣告受けしあなたの作品集一字一句に目を凝らすなり  
時間がない急げといふ声とほく聞きテスクに向かふ夜の更ぐるまで  
いのちあるうちに歌集をと望みたるあなたのおもひを受けて励めり  
いのちとの競争負けてなるものか『フウの木』が形を整へてゆく  
製本を終へてやうやく病床のあなたの手にいま歌集が届く

自分が歌集『フウの木』を携へてあなたは遠くへ行つてしまひぬ  
ラフマニノフが富美恵さんにはよく似合ふピアノ協奏曲第二番聴く

松浦楨子

御足参り

・羊

像高の三丈三寸見上ぐるに千三百年の面差しゆるむ

御本尊十一面の觀音様大和の國より洋上を経て

十三年記念の年に目の前の御足に触る院経の中を

山門の楠の木に添う桙牛の碑草年わずか三十一歳

ゆすらうめ五井の花がおつとりとお地蔵さまの肩よりのぞく  
相模湾のそよ風も共に參りませ御足に触るる双手の上を  
境内より見下ろす遠き相模灘折りのあとのみなざし放つ

松瀬トヨ子

路上駐車

・沖

路上駐車に道幅せまく利用者の家路をたどる軋む介護車

かたく張る乳房のごとく梅の実のひかりの中に日毎ふくらむ

調弦をしていし男の太き指弦をはじけりカチャーシー音頭

暗かりを子を咥えゆく黒き猫テレビに見入るウクライナ戦

何時間の間になくせしやわれの腕時計いすこで刻むやさびしき時間を

若夏のひかりの中に鉄砲百合の白を噴き出す空の綿雲

鉄砲百合はいくさの匂いただよいめ逃げ悪いたりし島に咲きし花

松 永 智 子 音

・風

三 好 聖 三 梅干し

・伊

・埼

聞にきく昇降機の音軽くしてその後音なきビルのひとくま  
玄関の間に一匹蛍るて青白く火をともす夜のふけ  
キッチンのタオルに茫と青白くともる螢火夜ごとさめみる  
さりながらさりながらを繰り返しつづくことばのあらず夜の闇  
枕元に螢火ひとつともりて日ざめし夜ふけさめをりながく  
終日を白き天井白き壁向ひすでにやき日の暮れ  
かへりくることばのなきを常としてみるとなくみる白き天井

三 浦 好 博

川村美術館

・銚

「ダビテ王の夢」に入りたる我は驥馬ウクライナからの難民運ぶ  
フレールの我らに羨しマイヨールのヴィーナスの腰尖りるる乳  
夢を見る宇宙の卵は滅びざりブランクーンの「眠れるミューズ」  
修正しソファーに長く瞑想するマーク・ロスコの暗き空間  
色の海泳ぎ泳きて今ときの多様性の華「カラーフィールド」  
厚塗りのコッホも叶はぬ厚さにてラリー・ブーンズの「雨のレース」は  
色の海はかくの如しと実践の「何を描くかよりどう描くかだ」

宮 本 靖 彦

奄美大島

・凌

茂 木 茂

おとうと

・埼

春雷おぼろに動く陸を飛ぶ子孫三代初めての旅  
滴開の赤つじ咲く奄美空港仰けば碧空雲ひとつなし  
東支那海太平洋分くる浦生岬細背の海波はへだてず  
初めてのカヌー遊泳両岸にガジュマル林根を揚げつづく  
子と孫の夫婦を写す大門蓋 岩間の大海上こまでも青  
裏六甲に山法師訪ねし日の遠く同行の友らみな世を離る  
山法師街に咲けどもやまほふし若葉ともなひ白白と咲く

花過ぎてみどり濃くなる山桜根元にひょと狸が見える  
おおらかに女も（俺）と言いたりし昔日のこの荒磯の村  
猫たちが煙草を喫う、とは言え止めぬ匂い主は雨降る夜も風吹く昼も  
ようやくに緑に染まる時となり櫻通りは寂寥を脱ぐ  
烟より帰りて間なく梅干しを含むあたかも覚悟のように  
猫たちの糞を袋に詰めてて春暁の庭鳥が逃げる  
乗客はひとりのバスがとろとろと退屈そうにのほる駅まで

御 代 田 澄 江

記憶の断片

・茨

火箸にて團扇裏に文字書き消しては書き就学前の吾に漢字教へし祖父  
これ何と読む「キ（木）」これは「ヒ（日）」祖父喜べば次々覚ゆ  
團扇裏の火箸支へに祖父腦溢血死す財産を天理教に獻げ尽くしと  
幼くて理解なし得ず祖母の命入水と聞きてても袂に石抱き  
父母の嘆きの深き計り得ず天理市を一度は見ておけと言はれしことも  
記憶の一端を舌に語りし父とても父祖の荷負はす意はなかりしを  
何よりも元気に一世生くべしと今なら言はむ父母へ感謝の日々よ  
十日前彼岸参りを共にせばかりに何と弟の死よ  
吾よりも八つも若い弟が逝きし知らせに言葉も詰まる  
五人兄弟末つ子なりし弟の何の因果か先に逝くとは  
笠山の百回記念登山には元気に連れ立ちし二年前の秋  
はかなかる生とは思ふ弟の享けてこの世に七十三年  
告別の斎場に降る雨脚のつよく冷たく悲しみの増す  
いまは亡き弟と見たしだれ栗辰野の町の旅もはるけし

もとむらしげと

五 月

・そ

山 本 孟

ブーちゃん憎し

・大

頬杖をつきつつ雲を眺めいる里美は今日も明日もひとり  
座ひとつなき中庭に飛びだして生徒ら美しき占描となる  
花袋を摘みつつおれば袋もつ生徒が寄りて集めてゆきぬ  
チャイム鳴り入りてゆけば併きて文庫本を読みふける子も  
中庭をかこむ二階のテラスから生徒らが聴くプラスの響き  
モップふり踊る姿がみゆる朝あけ放たれし五月の窓に  
四月より白き上履きの置かれたままの不登校児の靴箱

山 下 雅 子 七十周年記念号

・智

連綿と七十年の記念なる七六八号拝受す  
はからずも九十二年生きてこそ記念号に見ゆる幸あり  
風煮る五月令和に七十周年祝うわれらにコロナ疎まし  
創刊時の主宰の気配り情熱を果敢なお姿聞くありがたさ  
心篤き先輩歌人に支えられ今に続ける七十年重し  
ありありと五十周年に主宰亡き美智子夫人、椎名編集長  
ゆきりなく娘も古稀を迎へたりひたすら生きし歳月ならむ

山 野 幸 司 新 米

・沖

時に鳴く鶯あと妻の言う春は今年もおだやかに来る

新米の教師子の前大声が緑にかすむ山迫り来る  
おはようの元気な声に囲まれし幸せ一杯新米教師

チヨーク手に拙き文字の教師なの町はおだやか雲笑つてた  
教室に何の怒りぞ子をなぐる我も傷つき後悔残る  
水俣の海につながる田浦も病の影に暗く静まる

もぎたてのスナップエンドウ春をかむわが耕土の赤土やさし

ウクライナの無惨な姿に引き続きテレビは映す日本の花見  
爆裂に破壊・殲滅マリウボリ残る十万人生きざらめやも  
葬儀なく掘つて死体を放りこむハルキウの戦場整理の仕事  
敵とせば同族であれば残虐す源平合戦、ロ・ウの攻撃  
各国のロシア大使は無差別の暴虐映すテレビをどう見る  
最前線ニュース伝える記者のいてその死の失うことの大きさ  
風過ぎる桜並木にはらはらと命散りゆくあの若者たち

養学登志子 横田敏子

・愛

何でもない日に桜餃買つて来て丸一匹をどなして食す  
兜煮の目玉のしたの頬の身のほろりほぐる言うこともなし  
塩を振りひと夜さ寝かす冷蔵庫鋼飯の米多目に研ぐ  
鋼煮付け新牛蒡をつけあわせ反身の魚の見てよとばかり  
掌にたたく山椒の芽の香たつ鋼のしすもるうしお汁消む  
蓑の子のさくらひとひら衣となしてわが袖のぼる花びらがのぼる  
露の玉葉先にひかる春の雨雀寄り来てついとのみけり

横 田 敏 子 連 休

・福

見上ぐれば吸い込まれゆく心地なり五月の空の無垢なる背さ  
梅さくら、つづじぼうたん李来ればひらく花はな 姉顕ち来よ  
筍の鱗のような固き皮剥けば仏のような竹の子  
若きらの腕ビチビチと歎しかりまだ半袖になれないわたし  
わが思考停止中なる傍らの時計の秒針進む、進む  
連休は外出解かれて大移動日本列島はち切れそうに

横浜発八時郡山着六時 待ちくたびれし連休初日

吉永惟昭 知床岬

・熊

ゴールデン・ウイーク阻むコロナ禍に知床岬かなし追打ち  
人れ喰いのカレイ釣りつつ見はれたるカシュニの滝か思い出  
遭難と思ゆる発信 巡視艇 漁船はいぬか ヘリは何處ぞ  
救命の胴衣着けしもさい果ての汐ぞ冷たき黄昏迫る  
流水の消えしばかりのオホーツク奇跡祈らん座礁でもよし  
各部署の努力はわかるが刻一刻きざみゆく刻船影すらなき  
これだけの旅客機頻繁に飛び交うに緊急飛行機無きぞうらめし

佐藤道子

春

・甲

海棠をこよなく愛でつづきしゆゑ春は淋しと妹の文  
叔母の文見て涙ぐむ子の父は旅立ちてより二年となる

思ひ出の地へ旅するは何時ならむ今は淋しさつのるばかりで  
マスクせぬ鳥は友と呼び合へりマスクの人はすれ違ふのみ  
五羽十羽群れて遊べる雀たちはばらばら滅びに向かふ  
マスクせぬは老人ばかり若き等はしつかりマスクし早朝走る  
網引つぱり寄り来る散歩の大がんで挨拶するが習ひとなりぬ

萩葉子 新緑

・銀

小松菜の黄の花さかりマイガーテン葉を五枚ほど摘みて三月  
「おばさん」と呼ばれたときの新鮮さ幼児と石段すれちがうとき  
葉桜もすき新緑が日ごとまし一年ぶりの会う日近く  
街道のあの日あの時語りつきあつといふ間に別れのときが  
「場所変えて話しましょう」一杯のコーヒーひとまず話をつなぐ

久我田鶴子 染み

・羊

出身地ロシアと答へし人に向かひウクライナの方がなどとほざけり  
好惡もて分くるもの言ひに気づくなく笑ひかけさへするのであつた  
正しさの側に立つとでも思ひるむ笑ひを含む声のいやしさ  
コンビニに働く女性の透ける肌ロシアを離れロシアを背負ふ  
どきりとしロシアの人になりてゐる日本に暮らしコンビニに働く  
限られた情報ばかり与へられながらわかつたと言へばいいのか  
悲しみの染みはひろがるロシアにもウクライナにも人は生きゐて

